

「価値観違う」と否定でいいのか

映画監督、佐々木芽生さん 「捕鯨」テーマに新作

米在住の映画監督、佐々木芽生さん(53)は札幌市出身で3作目となる新作ドキュメンタリー制作を進めている。テーマは「捕鯨」。25歳で渡米し、太平洋の東と西を見ているがゆえに、双方の主張が合わないさまに危うさを感じた。「自分の価値観と違うものは受け入れない。戦争とは不寛容の末に起きるのではないか。2010年に撮影を始め5年になる。きっかけは、アカデミー賞長編ドキュメンタリー賞を受けた「ザ・コーヴ」(米では09年公開)だった。400年の捕鯨の歴史を持つ和歌山太地町のイルカ漁を隠し撮りし、徹底して否定する内容に「(欧米の)自分たちを絶対の善し、悪を暴いてやろうという視点を見た。漁がどんな自然観によるのか、耳を傾けようという「自然愛護者」という矛盾。太地町を訪れると、反捕鯨団体が浜を監視し、活動家と漁師がかみ合わないばかりになっていった。小さな入り江の町を撮影の矢面に立たせ、日本政府は「ワジラを食べることは日本の食文化」とする歴史を十分に説明していないと感じた。日本人の友人も「あの映画はドキュメンタリーじゃ

ない」と手法の批判ばかりだった。「ドキュメンタリー映画は、自分が知らない世界を見せてくれるためのツール。他者の考えを理解できないままでも、なぜかみ合わないのかを知ることが世界は変わる。自分の信念を遠慮なく伝えるツールも映画だった。映画監督になるのが夢だったわけではない」と言う。ニューヨークでテレビ局の番組制作の仕事をするなか、ある老夫婦に出会い、「ハーブ&ドロシー」という映画を撮った。2人は郵便員と図書館司書として働くさやかな生



新作映画のイメージ。題名はまだ決めていない

映画のホームページは<http://motion-gallery.net/projects/whalemovie>



来年公開を目指し、新作映画への支援を呼びかけるために来福した佐々木芽生さん

文化

ファクス 092(711)6243
メール bunka@nishinippon.co.jp

文化短信

▶講演会「弥生青銅器の世界」 23日午後2時、福岡市博物館(同市早良区百道港)＝092(845)5011。弥生時代の青銅器研究の第一人者、元国学院大学教授の棚田康雄さんが、青銅器の生産技術をいち早く習得した北部九州を中心に、古代東アジアの金属文化について語る。今秋予定する特別展「新・奴国展」のプレイベント。入場は無料で定員240人、当日先着順(午後1時半から受け付け開始)。

▶美術館テーマに国立美術館5館が合同展 美術館そのものをテーマにした国立美術館5館の合同展「ノ・ミ・ユー・ジ・アム、ノ・ライフ?」(これからの美術館事典)が6月16日～9月13日、東京都千代田区の東京国立近代美術館で開催。同館と京都国立近代美術館、国立国際美術館(大阪)、国

活のなかで値段が手ごろで、LDKのアパートに納まり、好きかどうかわからないで現代美術を買い集めたコレクターだった。金もつけないためには絶対売らず、作品を埋も

れるように猫と暮らし、4782点をナンショナルギャラリーに寄贈した。「幸せとは何か、生きがいとは何かを、2人は映している」と思った。映画なら長短にとられない。04年から振り始め、08年完成の「ハーブ&ドロシー」は世界各地の映画祭で賞を取り、13年には、寄贈作品のその後を追った続編を発表した。

老夫婦の人生から対立の世界へと描くものは異なる。ただ不変の価値への興味は同じ。時間をかけて追う点は同じ。広告宣伝費ゼロも同じ。太地町に通い、研究者や活動家にインタビューした。作品は、来年初めの完成と、夏の劇場公開を目指している。編集作業は7千円から、クラウドファンディングと呼ばれる、インターネットを通じて支援を呼びかけている。「価値観の違いに謙虚に耳を傾ける」との価値を伝えたい。長くコンビを組む米国人の女性編集者に対して、

捕鯨めぐると対立 映画で問題提起

捕鯨の現実を描き、観客が考えを深められるような映画を捕鯨国・日本から発信したい。そんな思いでニューヨーク在住の映画監督の佐々木芽生さん(53)は、捕鯨をテーマにした長編ドキュメンタリー映画の制作資金を集めている。

和歌山県太地町の伝統的なイルカ漁解禁の毎年9月になると、米国で日本の捕鯨を批判する報道があふれることに違和感があったという。同町のイルカ漁を批判的に描き、2010年にアカデミー賞を受賞した映画「ザ・コーヴ」を見てもどかしさが高まった。「日本側の視点も伝えなければ」。太地町の漁師や、国際捕鯨委

員会(IWC)などを取材し始めた。「捕鯨問題の向こうにある、あらゆる対立の構図に思いを巡らせてほしい。さまざまな問題提起ができる作品にしたい」

佐々木さんは13年、米美術館に多くの現代アートを寄付した老夫婦を追った「ハーブ&ドロシー2 ふたりからの贈りもの」の制作や配給のため、当時日本最高額の1463万円をクラウドファンディングで集めた経験がある。

- 目標額 1500万円
- 特典例 支援額3000円で、映画公式サイトに名前を掲載、前売り券2枚



私の視点



ドキュメンタリー映画監督

きき めぐみ
佐々木 芽生

日本と欧米を中心とする反捕鯨国との間で、クジラやイルカを巡って半世紀近い対立が続いている。

欧米では、クジラやイルカは人間に近い知能を持つ賢い動物で、絶滅の危機にひんしており、日本が違法に捕獲していると多くの人が信じられている。米国に住んで30年近くになるが、反捕鯨の一方的な意見しか聞かえてこない。問題は情報の欠如にあるのではないか。そう思っ

私は今、世界中から批判されている捕鯨のまち、和歌山県太地町を主な舞台に、捕鯨論争を描く長編ドキュメンタリー映画を制作している。

ところが、この映画の情報があつという間に世界中に発信され、攻撃の対象となった。きっかけは、映画の制作資金を集めるためにクラウドファンディングというネットを使う手法で広く支援を呼びかけていたところ、「太地町のイルカ漁について、よりバランスの取れた映画を計画中」という見出しの英文記事が掲載されたことだった。

「イルカ漁に、バランスはあり得ない」「イルカ殺しは殺人と同じ」などと非難のメッセージが相次いだ。映画はまだ完成もしていないのに、ある環境保護団体からは「プロパガンダ映画監督」と名指しで個人攻撃まで受けた。

しかし、本当に「バランスはあり得ない」のか。太地町は人口3千人あまりの小さな漁村で、400年前

互いの意見聞くことから

捕鯨論争

からクジラを捕って生活してきた。クジラは食料資源としてだけでなく、人々の生活や精神文化に深く根付いている。また、イルカの追い込み漁がよく批判されるが、資源管理の面から、必要以上の捕獲はしていない。「バランスはあり得ない」と言っ、このような論点を切り捨てるのは疑問である。

ただ、今では日本人がクジラを食べる量は1人当たり年間30kg程度に減っているという。太地のように捕鯨の歴史がある地域は別として、クジラは日本全体の食文化と言えるのか。国内の捕鯨反対者の意見にも耳を傾けることが必要だ。

問題は、欧米でも日本でも極論の応酬になっていることだ。ネット社会の今日は、特に欧米の活動家から単純化した激しい言葉が大量に発信され、またたく間に世界中に拡散していく。自分たちの意見を絶対善だとみなし、それに異を唱える意見は攻撃したりはねつけたりしている。対立を深めこそすれ、建設的な議論にはなり得ないだろう。

日本の漁師も反捕鯨団体も、海洋資源を守ることを望んでいるのは共通のはずだ。捕鯨賛成、反対の双方の意見を聞くことで初めて、両サイドに新しい気づきと理解が生まれるのではないかと思う。

◆投稿は手紙か sihen@asahi.com へ。電子メディアにも掲載します。